

「當國順礼手引」について

會員 年光保秀

はじめに

筆者は文化十年に年光治兵衛が買い求めた「當國順礼手引」(以下「手引」と略記)を所蔵している。これは周防国の三十三観音を紹介したものであるが、虫食いあるいは後に表紙を補強したりしてある。

(本文三九枚(内欠落一枚) 中表紙及び表表紙三枚計 四二枚。縦一二二、横一七五、厚さ一〇耗。和綴)

當國三十三番観音の札所は、一番玖珂郡高森邑の二井寺山極楽寺に始まり、三十三番吉敷郡吉木邑瀧塔山瀧蔵密寺に及ぶのであるが、今回はその内の旧都濃郡内の札所について述べ、併せてこの「手引」の著者について考えてみたい。

「當國順礼手引」紹介(拔萃)

中表紙

「當國順礼手引」(菊花・桐紋 朱印)

本文

「當國三十三番観音之來由并序

恭<sup>(番)</sup>以観世音菩薩者過去古佛而爲<sup>(レ)</sup>使<sup>(レ)</sup>郡生得度<sup>(一)</sup>假現<sup>(三三)</sup>十三身<sup>(一)</sup>其應漫不<sup>(レ)</sup>施、就<sup>(レ)</sup>中有<sup>(二)</sup>魚籃賣弄方便<sup>(一)</sup>成<sup>(三)</sup>馬即<sup>(番)</sup>誓姻善巧<sup>(一)</sup>其餘靈感不<sup>(レ)</sup>可<sup>(二)</sup>勝計<sup>(一)</sup>、嗚呼可<sup>(レ)</sup>謂大慈大悲也、而當國三十三番起始<sup>(二)</sup>于大内十九代正壽院道階入道弘世<sup>(一)</sup>、弘誓深如<sup>(レ)</sup>海、因<sup>(レ)</sup>茲<sup>(番)</sup>取<sup>(番)</sup>領之本國於<sup>(二)</sup>防<sup>(番)</sup>劔<sup>(番)</sup>之内<sup>(一)</sup>草<sup>(二)</sup>創<sup>(三)</sup>三十三字<sup>(一)</sup>、嗜<sup>(レ)</sup>之仰<sup>(レ)</sup>之、今雖<sup>(レ)</sup>歷<sup>(三)</sup>三<sup>(百)</sup>有<sup>(百)</sup>余年星霜<sup>(一)</sup>感應不<sup>(レ)</sup>虛來往嫻々不絶如<sup>(レ)</sup>縷、殊中春初馬林鐘會日夷則縁日老若連<sup>(レ)</sup>袖刷<sup>(レ)</sup>齊、予信感不<sup>(レ)</sup>斜自<sup>(二)</sup>壯年之始<sup>(一)</sup>到<sup>(レ)</sup>今日詣<sup>(三)</sup>三十三所<sup>(一)</sup>及<sup>(三)</sup>三十三回<sup>(一)</sup>、故謹探<sup>(三)</sup>三十三所之來由<sup>(一)</sup>考<sup>(二)</sup>其首尾<sup>(一)</sup>鏤<sup>(レ)</sup>梓以傳<sup>(二)</sup>無朽<sup>(一)</sup>云爾

享保七歲<sup>(壬寅)</sup>仲冬穀日

(一枚欠落)

(中略)

當國三十三番觀音  
 之來由 中序  
 恭以觀世音菩薩  
 者遶古佛而為使  
 耶生得度假現三十  
 三身其應漫不施脫  
 中有藥籃賣弄方便  
 成馬馬頭觀音巧兵

十四番同郡慈山金  
 紋山福田寺尊山本  
 尊如菩提觀音御  
 長一尺八寸之座像  
 聖德太子之作  
 十五番同郡富田  
 中山蓮宅寺當山  
 本尊馬頭觀音御  
 長一尺七寸弘法大

師之作  
 十六番同郡富田空  
 龜山岩屋寺當山  
 本尊聖觀音御長  
 三尺五寸弘法大師  
 之作  
 十七番同郡富田  
 富田寺當山本尊觀  
 音護朝之作

十八番同郡富田  
 福寺當山本尊  
 觀音護朝之作

十一番 都濃郡山田邑紫雲山蓮臺寺

當山本尊如意輪觀音オンタケ九寸三分座像行基之作

山高さここに蓮はちのうてな寺

これも諸佛の受衣の庭かな

堂は二間四面南向き、蓮臺寺より花岡へ一里、これより禪定寺へ十八丁坂あり

筆者注 管理一多門院

本文は殆どひらかなであるが、適宜漢字におきかえた

十二番 同郡末武花岡白谷山禪定寺

當山本尊千手觀音御長三尺三寸之立像惠心僧都作

協立不動毘沙門弘法大師作

あら尊と木々の梢のりに法の華

思へば後世は尚もたのものし

堂は三間四面、南向き、禪定寺より日尾山日面寺

へ一里難所坂あり、大水のときは川下橋へ廻る

(注 梁の觀音、管理一闍伽井坊)

十三番 同郡久米日尾山日面寺

當山本尊如意輪觀音、御長六寸四闊浮檀金之尊像、

聖武皇帝之守護佛脇立挾持二天 長六尺聖德太子

之作并二天長八尺有餘同作

海近く南に向ふ日面寺ひおも

補陀洛山ふだろも近くなるらん

堂は二間半南向き、日面寺より徳山福田寺へ二里

注 明治五年受天寺と合併し、更に昭和二

八年宝藏寺と合併して、今は宝藏山日天

寺と改称し、花岡の高橋に移転

十四番 同郡徳山金砂山福田寺

當山本尊如意輪觀音御長一尺八寸之座像 聖徳太

子ノ作

法の種野上の里に蒔きおきて

花咲き実のる福田寺かな

堂は南向き、北山へ半里、これより中山蓮宅寺へ

半里

十五番 同郡富田蓮宅寺

當山本尊馬頭觀音 御長一尺七寸弘法大師之作

てらげなる心のこまのはなれもや

うき世をめぐる中山の月

堂は二間四面、南向き、蓮宅寺より岩屋寺へ十三

丁、この間、河あり

(注 管理一岩屋寺)

十六番 同郡富田宝亀山岩屋寺

當山本尊聖觀音 御長三尺五寸弘法大師之作

補陀洛や峯をうつせる岩屋寺

おもきや法の誓なるらん

堂は二間四面、南向き、岩屋寺より建咲院へ十八

丁

十七番 同郡富田淨宝寺（注 建咲院）

當寺本尊觀音 醍朝之作

池水の清く涼しき宝寺

蓮の心誰か濁さん

堂は九尺四面、南向き、建咲院より川崎萬福寺へ

六丁

十八番 同郡富田萬福寺

當寺本尊 觀音 醍朝之作

ちかいある佛のみ手のかずくくに

たむけの糸をかけて頼まむ

堂は二間四面、西向き、萬福寺より若山法蓮寺へ

一里

（注 寺伝によれば、この祕佛は平安時代末期平

家の武士景清の護身佛で、長一寸八分の十一

面觀世音菩薩の黄金佛。故あってこの寺へ奉

納した。万福寺は江戸時代末期に須々万へ移

転し、堂は建咲院が管理していたが地元民の

熱望により、昭和三五年に宗教法人川崎觀音

堂として独立した）

十九番 同郡矢地邑嶺若山法蓮寺

當山本尊聖觀音、御長五寸三分之座像醍朝之作

峯高くわけいるころ若山の

普賢文珠もあらたなるなん

堂は二間四面、西向き、法蓮寺より富海の祥雲寺

へ二里

（注 寺は若山城合戦の時焼失した。百年後に普

春寺を建立し、觀音堂も移転新築した）

二〇番 都濃郡富海邑祥雲寺（注 現滝谷寺）

當山本尊十一面觀音 御長二尺三寸五分之座像

大内左京太夫義弘公母儀守護佛 左京太夫建立之

靈地也

山高き那智を移してみ熊野の

ここにあらわす誓なるらん

（以下略）

著者について

次にこの「手引」の著者について考究してみたい。「手引」の終末に補足してある文章から、著者慈閑は、都濃郡

の住僧で幼くして佛家に入り、壯年の頃から観音を信じ、三年間に三十三回札所巡りを行った。そして古事來歴を調べ、途の遠近を記して、版にし後人のために残したいと考えた。

その頃、当郡須万村の大丈夫福田彦三郎吉は、齡不惑に及び觀世音を信じるようになり、慈閑の厚信を感じ、志を一つにして今世、後世の巡礼の伴侶とすることを願ったとある。

又「手引」の奥書には、須万村の福田三郎右衛門は版木を作り印刷をしたが、その費用にと母が自分の衣服を売って資金の足しにあてたとある。

この版木は享保七年（一七二二）に熊毛郡平生町の岩國屋長吉が彫刻し、玖珂郡二井寺山の経藏に奉納した。

話は一転して、先年須万田原の松原家邸内で、石下げの碑が発見された。これに享保一九年（一七三四）の作で、都合代官 光井五郎右工門、庄屋 福田三郎右衛門の名が刻まれている。

当時、須万では米の代りに、全部和紙を上納することになっていた。米に換算すると、寛永二年（一六二五）は四三三三石であったのが、寛永六年には六七六六石に増加されている。

須万の地形や氣候から考えて、農民の生活は益々苦境に陥り、農家の三分の一が離村するにいたった。それから約四〇年後の寛文一〇年（一六七〇）、遂に農民一揆が起り約三五〇名が集団をなして栄合まで出向いて來た事件があった。

その後約三五年後の享保一九年に、時の都合代官及び庄屋の懸命な努力によって、四七三八石に石下げ（減税）となつてゐる。

この時の地元の庄屋福田三郎右衛門は、前述の福田彦三郎吉が庄屋になつた時、改名したものと、僭越ながら筆者は推測してこの稿を終る。

（平成五年二月一三日例会発表）

（P. 26からつづく）

須万方・下谷 七九、五三八二 中須 四五、四五一四

須万 七三二、七一六 大向 五、八五五

賀野 三八、三二八

〔寛永二年防長両国檢地村別石高表〕  
〔徳山大学論叢〕第一三号より